小学生・中学生・高校生のスポーツ参加に与える家庭背景の影響に関する研究

―SSF データの二次分析を通して―

スポーツ文化研究領域

5020A070-8　余　夢　YU MENG　　研究指導教員：中澤　篤史　准教授

【序章】

日本の社会でスポーツ文化は、ますます人々の関心を集めている。スポーツ庁(2018)は「する・みる・ささえる」といった多様なスポーツライフを通じて、スポーツ参画人口の拡大を目指している。馬場・石山（2008）によると、保護者が子どもに対して積極的に外遊びやスポーツをさせなくなっているという現実や、子どもの体力向上の全ての責任を学校や教員に押付けているということから、多くの時間を子どもと過ごす保護者の関わりが重要になると指摘されている。また、部活の車送迎といった子どもスポーツへの支援が親に負担をかけるなどの現状から、学校・地域・社会におけるそれぞれの取り組みの中で、子どもの生活の基盤となる「家庭」は重要な位置を占めているであろう。特に、家庭構成となる保護者の関わりや行動に関する課題は研究する必要があり、それは子どものスポーツ活動への参加との関連性がどうなっているのかなどの課題も重要になると考える。

以上の問題関心から、本研究では、子どものスポーツ活動への参加と家庭背景の関連性を明らかにすることを目的とする。

【第１章】

第１章では家庭背景と子どものスポーツ参加に関する先行研究を検討した。第１節では、主に小学生・中学生・高校生のスポーツ実施に与える家庭背景について検討した。第２節では、主に小学生・中学生・高校生の課外スポーツ活動への参加に与える家庭背景について検討した。第３節では、SSF データセットを用いた先行研究を整理した。これまでの研究を踏まえ、子どものスポーツ参加に及ぼす家庭背景に関する分析モデル図を提示し、具体的な６つの問いを図に沿って整理した。その問いを明らかにすることを通じて、保護者のスポーツ活動への関わり方が、小学生・中学生・高校生のスポーツ活動の参加に及ぼす影響について、家庭の経済的条件を踏まえて記述し、説明することを試みる。

【第２章】

本研究では、小学生・中学生・高校生の運動・スポーツ活動への参加と、保護者のスポーツ習慣や経済的条件といった「家庭背景」との関係性を明らかにするために、本研究で SSF が提供した「子ども・青少年のスポーツ・ライフに関する全国調査」のデータによる二次分析を行うこととする。第２章では、二次分析の利点や限界、有効性について記述した。また、本研究では用いる SSF のデータについて説明した上で、データと変数の設定および記述統計量について記述した。

【第 3 章】

第３章では、家庭背景の一つである保護者のスポーツ習慣と小学生・中学生・高校生のスポーツ参加の関連性についてクロス集計およびカイ２乗検定を行った結果を考察した。その主な結果としては、父親のスポーツ習慣がある中学生はスポーツを実施し、父親のスポーツ習慣がない中学生はスポーツを実施しないという傾向があるが、母親のスポーツ習慣の子どものスポーツ実施への影響は見られなかった。このような家庭内のジェンダー差だけではなく、スポーツにおけるジェンダー問題も無視できない存在である。また、小学生時代に学校外のスポーツクラブに加入し、中学生・高校生になると、学校内の運動部活動に加入する傾向がある。家族と一緒に運動・スポーツを実施している子どもほど、課外スポーツ活動の加入が相対的に高くなっている傾向がある。次の章から、家庭の経済的な条件から、子どものスポーツ参加に及ぼす影響を分析していく。

【第 4 章】

第４章では、家庭の経済的背景と小学生・中学生・高校生のスポーツ参加の関連性についてクロス集計およびカイ２乗検定を行った結果・考察を検討した。主な結果としては、子どもの課外スポーツ活動の加入率に関しては、経済的に豊かなものほど加入率が高くなる傾向がある。「400 万円未満」という低い年収家庭の子どもほど、課外スポーツ活動への加入率が比較的に低く、その経済的な格差によってスポーツへのアクセスという機会が少なくなるといえる。また、課外スポーツ活動加入状況を検証してみると、「400 万円未満」という低い年収家庭の子どもほど、学校内のみ群の割合が高く、運動部活動に依存することが分かる。

【結章】

本研究の知見をモデルにより整理した。子どもの生活の基盤となる「家庭」が重要な位置を占めている。スポーツへの社会化過程において「重要な他者」である両親の関わりや家庭の経済的格差によって、子どもに対するスポーツ教育、スポーツできる環境の格差が生じるといえる。